

応力法による骨組構造の有限変位解析

熊本大学	工学部	正員	三池 亮次
同	上	○学生員	福地 良彦
同	上	正員	小林 一郎

1. 始めに、物体内部の任意点 $\mathbf{x}$ において、物体力 $\mathbf{f}$, 境界において表面力 $\mathbf{p}$ を受けて、変形の中間状態からの任意点の有限変位 $\Delta \mathbf{u}$ を生じてつり合い状態にあり、その内部の任意点の Kirchhoff 応力が $\mathbf{T}_k$ で、一種のひずみテンソルが $\Delta \mathbf{E}_k$ であるとする。このつり合い状態において、物体力と表面力の仮想の微小増分 $\delta \mathbf{f}$, $\delta \mathbf{p}$ があり、それに伴って、仮想 Kirchhoff 応力増分 $\delta \mathbf{T}_k$ が生ずるとすると、有限変形補仮想仕事の原理に従って、 $\delta \mathbf{p}$ が有限の変位 $\Delta \mathbf{u}$ に対してなす補仮想仕事 δW は、 $\delta \mathbf{T}_k$ が $\Delta \mathbf{E}_k$ に対してなす仕事の積分に等しく、⁽¹⁾

$$\begin{aligned} \delta W &= \int_A \delta \mathbf{p} \cdot \Delta \mathbf{u} dA + \int_V \delta \mathbf{f} \cdot \Delta \mathbf{u} dV = \int_{A'} \delta \mathbf{p}^* \cdot \Delta \mathbf{u} dA' + \int_{V'} \delta \mathbf{f}^* \cdot \Delta \mathbf{u} dV' \\ &= \int_{V'} \text{trace} \left\{ \mathbf{T}_k \left(\frac{\partial \mathbf{x}}{\partial \mathbf{x}'} \right)^T \frac{\partial \Delta \mathbf{u}}{\partial \mathbf{x}'} \right\} dV' = \int_{V'} \text{trace} (\delta \mathbf{T}_k^T \Delta \mathbf{E}_k) dV' = \delta U' \end{aligned} \quad (1)$$

ここに、物体の変形の状態を変形前、中間、変形後の3段階に分け、 dA' と dV' は中間状態、 dA と dV は変形後の状態における面積および体積要素である。

2. 2次元骨組構造で、せん断力が無視される骨組構造 式(1)において、仮想 Kirchhoff 応力テンソルは

$$\mathbf{T}_k^T = \begin{bmatrix} \frac{SA_1}{SA'_1} & 0 \\ 0 & \frac{SA_2}{SA'_2} \end{bmatrix} \mathbf{S} \mathbf{\Sigma}^T \begin{bmatrix} \frac{1}{\sqrt{g_{11}}} & 0 \\ 0 & \frac{1}{\sqrt{g_{22}}} \end{bmatrix}, \quad \mathbf{S} \mathbf{\Sigma}^T = \mathbf{S} \begin{bmatrix} \sigma_{11} & \sigma_{12} & \sigma_{13} \\ \sigma_{21} & \sigma_{22} & \sigma_{23} \\ \sigma_{31} & \sigma_{32} & \sigma_{33} \end{bmatrix} \quad (2)$$

である。 $\mathbf{S} \mathbf{\Sigma}^T$ は、いわゆる、変形後の仮想の物理的応力マトリックスで、 g_{ij} は、共変計量テンソル $\mathbf{G} = (\partial \mathbf{x} / \partial \mathbf{x}')^T \partial \mathbf{x} / \partial \mathbf{x}'$ の対角要素である。

2次元骨組構造のとき、式(1)の $\partial \mathbf{x} / \partial \mathbf{x}'$ は、共変基底ベクトル $\mathbf{e}_i$ で構成され

$$\frac{\partial \mathbf{x}}{\partial \mathbf{x}'} = \begin{bmatrix} \frac{\partial \mathbf{x}}{\partial x'_1} & \frac{\partial \mathbf{x}}{\partial x'_2} \end{bmatrix} = [\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2] \quad (3)$$

中間状態における埋め込み直交座標 x'_i 軸の、変形後の方向余弦を ℓ_i とすると $\ell_i = \mathbf{e}_i / \sqrt{g_{ii}}$ である。部材軸方向に x'_1 軸をとる場合には $\sigma_{22} = 0$, また、せん断応力 $\sigma_{12} = \sigma_{21} = 0$ の場合

$$\begin{aligned} \delta U' &= \int_{V'} \text{trace} \left\{ \begin{bmatrix} \sigma_{11} \frac{SA_1}{SA'_1} & 0 \\ 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \ell_1 \frac{\partial \Delta u}{\partial x'_1} & \ell_1 \frac{\partial \Delta u}{\partial x'_2} \\ \ell_2 \frac{\partial \Delta u}{\partial x'_1} & \ell_2 \frac{\partial \Delta u}{\partial x'_2} \end{bmatrix} \right\} dV' \\ &= \int_{V'} \sigma_{11} \frac{SA_1}{SA'_1} \ell_1 \frac{\partial \Delta u}{\partial x'_1} dV' \end{aligned} \quad (4)$$

式(4)において、 $\delta U_1 = \ell_1 \delta \Delta u$ は、剛体回転 $\Delta \theta$ に伴う成分 $\delta u_\theta = \delta x'_1 (1 - \cos \Delta \theta)$ と、伸び $\delta \Delta u_e$ の和であるので、⁽²⁾

$$\delta U' = \int_{V'} \sigma_{11} \frac{SA_1}{SA'_1} \left\{ \frac{\partial \Delta u_e}{\partial x'_1} + (1 - \cos \Delta \theta) \right\} dV' \quad (5)$$

中間状態と変形後における面積要素の間には $SA'_1 = SA_1$ の関係があり、変形後の仮想物理的直応力 σ_{11} は、平面保持の法則に従い、軸力 SN と曲げモーメント SM によって

$$S\sigma_n = \frac{SN}{A} + \frac{SM}{I} x \quad (6)$$

のように与えられる。ここに、 I は断面2次モーメント、 x は、中立軸からの距離である。また、ひずみ

$$\frac{\partial u}{\partial x} = \Delta e_m + \Delta \phi x \quad (7)$$

ここに、 Δe_m は軸力によるひずみ、 $\Delta \phi$ は曲げモーメントによる断面の回転角であるから

$$SU' = \int \left[\Delta e_m + (1 - \cos \Delta \theta) \right] \{ SN + \Delta \phi SM \} dx \quad (8)$$

トラス部材で、軸力のみが生じる場合には、 $SU' = SN \{ \Delta l + (1 - \cos \Delta \theta) l \}$ となる。 S_p を仮想外力、節点変位を Δd 、仮想部材断面力を S_{pm} 、部材のひずみベクトルを Δe_m とすると、式(1)と(8)より

$$S_p^T \Delta d = S_{pm}^T \Delta e_m' \quad (9)$$

トラスの場合には、上式において S_{pm} は①部材の仮想軸力 SN ($i = 1, 2, \dots$)で構成され、又、ひずみベクトル $\Delta e_m'$ は、

$$\Delta e_m' = \Delta e_m + \Delta e_\theta \quad (10)$$

のように、①部材のひずみ Δe_{m0} を要素とする Δe_m と、①部材の見掛けのひずみ $(1 - \cos \Delta \theta_0)$ を要素とするベクトル Δe_θ によって構成される。

不静定構造において、余材の一対の自己釣合荷重を $\pm \mathcal{B}$ とし、 p の代りに $\bar{p}^T = [p^T \ \mathcal{B}^T]$ を外力と考え、それに対応する仮想外力を $S\bar{p}^T = [S_p^T \ S_{\mathcal{B}}^T]$ とすると、仮想部材断面力と、 S_{pm} と、式(9)は、

$$S_{pm} = [B_0 \ B] \begin{bmatrix} S_p \\ S_{\mathcal{B}} \end{bmatrix} \equiv \bar{B} S \bar{p}, \quad S \bar{p}^T = \begin{bmatrix} \Delta d \\ 0 \end{bmatrix} = S_{pm}^T \Delta e_m' \quad (11)$$

又、たわみ性マトリックスを、 $F_m = \text{diag} \{ 1/EA_0 \}$ とし、

$$\Delta e_m = F_m \Delta p_m \quad (12)$$

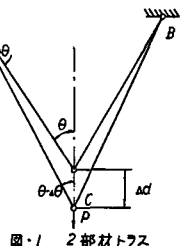
変形後の部材断面力は、

$$P_m + \Delta P_m = \bar{B} (\bar{p} + \Delta \bar{p}) \quad (13)$$

式(13)を(12)に、式(12)を(10)に代入し、更にこれと、式(11)の第1式を式(11)の第2式に用いると、

$$\Delta \mathcal{B} = -(B^T F_m B)^{-1} \{ B^T F_m (B_0 \Delta p + \bar{B} \bar{p} - p_m) + B^T \Delta e_\theta \} \quad (14)$$

$$\Delta d = B_0^T F_m \{ B_0 \Delta p + B_0 \mathcal{B} + \bar{B} \bar{p} - p_m \} + B_0^T \Delta e_\theta \quad (15)$$



図・1 2部材トラス

3. 簡単な例題 静定で $\Delta \mathcal{B} = 0$ で、図・1の2部材トラスのC点の変位 Δd を求める。
 $N = P/2 \cos(\theta - \Delta \theta)$ であるから、

$$B_0 = \begin{bmatrix} \frac{1}{2 \cos(\theta - \Delta \theta)} & 0 \\ \frac{1}{2 \cos(\theta - \Delta \theta)} & 0 \end{bmatrix}, \quad F_m = \begin{bmatrix} \frac{1}{k} & 0 \\ 0 & \frac{1}{k} \end{bmatrix}, \quad \Delta e_\theta = \begin{bmatrix} (1 - \cos \Delta \theta) l \\ (1 - \cos \Delta \theta) l \end{bmatrix}, \quad \Delta d = \frac{P}{2k \cos^2(\theta - \Delta \theta)} + \frac{(1 - \cos \Delta \theta) l}{\cos(\theta - \Delta \theta)}$$

参考文献 ①三池亮次“有限変形における補足仮想仕事の原理とその応用”応用力学連合講演会，昭和54年11月

②三池亮次，他“回転を考慮した増分形有限変位解析”，昭和55年工不学会西部支部

③Livesley，“Matrix Methods of Structural Analysis”